

大学連携会議（概要）

飯田市と関係の深い大学の教員等が一同に会し、今後の方策について検討するため「大学連携会議」を開催した。

○開催時期

平成23年1月29日（土）～30日（日）

○会場

飯田信用金庫2階大会議室
豊橋技術科学大学飯田サテライトラボ

○主催

飯田市・しんきん南信州地域研究所（共催）

○メンバー

牧野 光朗 飯田市長／池田 征人 飯田信用金庫理事長／徳永 保 文部科学省国立教育政策研究所長／各大学教員※別紙資料1参照

○内容（概略）

大きなコンセプトとして「21世紀型の新しいアカデミーの機能や場をつくる」とし、参加者に自由な発想で議論していただいた。

結論

- ・この大学連携ネットワーク名称を「学輪IIDA」とする。
- ・さまざまな提言、課題、意見が出た。これらの中から現実的なもの、実施可能なものを抽出し、具体的にアクションを起こしていくため、プロジェクト会議を設置し、検討を深める。

※ 内容については以下の通り。

あいさつ・趣旨説明 ※要点のみ抜粋

- ・牧野 飯田市長

飯田市のこれまでの大学連携の取り組みと今後の飯田市の将来展望について説明。またそれにおける飯田市が抱える課題及び、目指す姿（21世紀型の新しい大学機能を追求できる学術研究都市的なもの）について、参加者による意見交換会や提言を要望した。

話題提起 ※要点のみ抜粋

- ・徳永 文部科学省国立教育政策研究所長

話題提起として、日本における大学教育の現状と、世界との比較について説明。関係する大学の教員・研究者の方々が英知を集め、飯田の地にこれまでにない全く新しい形の教

育の場を作り上げていただきたいとの話をいただいた。

意見 ※要点のみ抜粋

1. 大学連携の組織的なネットワークとして機能するもの

- ・ 集まった大学・教授が1つの飯田大学として何かできれば確かにおもしろい。
- ・ 豊橋技科大サテライトラボの例
- ・ 大学院大学の可能性
- ・ 教育関係共同利用拠点制度

2. 大学連携の方向性

- ・ 飯田を起点とした知のネットワークの構築、21世紀型大学的機能、学術研究都市。
- ・ リニア飯田駅設置を見据えた将来像は「小さな世界都市」「多機能高付加価値都市圏」。
- ・ 「飯田学」を基本に置き自由な研究を認める。飯田を通して日本を学び、世界に出していく。飯田学に徹底的にこだわったコアカリキュラム。

3. 飯田工業高校の活用方法

- ・ 宿泊施設を含めいろんな利用が十分可能、複合的な展開ができそう。
- ・ インターンシップ・フィールドワークの学生等、及び研究者の活動拠点・滞在施設。
- ・ 図書館構想
- ・ 工学部的利用（電磁環境が良い）
- ・ 人形をつくる工作室、保管場所あるいは展示。
- ・ 農業法人、農家レストラン、農業を志す学生、外国人の方にとっても魅力的なこと。
- ・ JICAと組んでPC環境等整えていけば、外国人も集まる国際的な拠点。

4. 飯田で何を学ぶか

- ・ 先進的な環境政策、再生可能エネルギー
- ・ 社会教育、地育力、文化的風土
- ・ 地域自治の仕組み、経験、知恵
- ・ 行政と市民・事業者等とのパートナーシップ
- ・ 地域自立のモデルが学べる

※ 飯田の何がいいのか もう一度いろいろな視点から集める必要がある。まだそれが共有できていない。それを学生にどう教えるか、東アジアの人たちにどう伝えていくか。

5. 国際化に関して

- ・ グローバルに戦える、生き抜く力のある人を育てられる土俵をつくっていかれば。
- ・ 東アジア若衆宿・・・単位に結びつきたい。

- ※ いろんな国の人たちが集まったの実践的な学びは、集まればいいということではなく、何を学ぶかを明確にしてメッセージを出すことが必要であり、彼らは社会の安定等きちんと相互が支え合う仕組みを学びたがっている。彼らが主体にあるべき。
- ※ やりたいことと、それができるかできないかは別問題。そこは慎重に考えるべき。
- ※ JICAなど日本でのプログラム後のフォローワークが必要。

6. 具体的な話

(1) カリキュラム、場づくり・システム

- ・ 飯田市で学ぶ内容をまとめたカリキュラムをつくる。そのカリキュラムは、日本語ベースと英語ベースの両方をつくる。
- ・ 多くの大学の子たちがやってきて、大学の垣根を越えたインターゼミ風あるいはインターユニバーシティ風に、地域市民等と議論できる場づくり・仕組みつくりと、そうしたカリキュラムが必要。
- ・ 各大学・先生がさまざまな形で関わりあえる仕組み：学際（A大学の学生がB大学の先生に面倒をみてもらう、あるいはその逆）
- ・ 開かれたネットワークづくり：業際（市民と、中堅企業勤務の中堅世代と、高校生や中小生と、議論したり場を共有できる）

(2) 論文、刊行物など

- ・ 紀要をつくり将来的にはそれを叢書化するような形で年1回など刊行する。院生などに論文等を投稿させ、当然査読論文等の形で一定のオーズライズ化をし、飯田の研究成果を毎年明らかにしていく。もちろん英語版も。将来は研究職をつくることも。
- ・ 良い論文を書いた学生はしんきんシンクタンクの任期付き研究員・・・しんきんシンクタンクのマンパワーの確保。
- ・ 学輪 IIDA 研究者の研究成果のデータベースをつくりウェブ上で公開する。

(3) 補助事業等の制度

- ・ 学生たちのモチベーション、インセンティブのため交通費・滞在費などを保障する手立て。文科省の支援の獲得。
- ・ 就業力育成支援GPのキャリア教育+面談指導のプログラムは5年間の2年目に入る。残る4年間の中で、学生に関係性の中で学ばせるシステムづくりが飯田でできないか。

(4) 各大学のバックアップ体制

- ・ 一定の緩やかな理解やバックアップが必要。事務職担当の理解を得るため、見学会的な招待事業を実施したらどうか。